

「神は偏らない 鱗の目を持った人はだれか？」

使徒10:24 11:1~18

■ 大切なこと

国王によって政策がコロコロ変わる独裁国家がありました。この人の問題点は、その時のニュースやリーダーの言葉に振り回されて、その事を考察せずに言われた事を鵜呑みにして行動していることです。本当に大切なことはどんなリーダーがどんな事を言おうとも、先を考えてどうなっていくのかを考える知恵なのです。私たちはその知恵をすでに聖書から得ています。状況がどう変わろうとも、あなたはその場その場において、必要な事を必要な時に行うことができるのです。

そこで大切なことは、その人の特性を生かした乗り越え方です。「Bridge」というアニメ動画が紹介されました。吊り橋を動物達が渡ろうとしますが、大きな動物同士ではすれ違えない幅の吊り橋です。吊り橋の中間付近で最初に出くわしたのは熊とトナカイ。どちらも大きいのですれ違えません。お互いに「お前がよけろ！」と喧嘩をはじめます。すると、熊の後ろから今度はアライグマ。トナカイの後ろからはウサギが渡ってきます。徐々に譲れない思いは喧嘩に発展しました。その結果、熊はアライグマを叩いて吊り橋の外に排除し、トナカイもウサギを排除しました。理不尽に排除されたアライグマは得意な手先の器用さ、ウサギは備わっている前歯を使って吊り橋の片方の縄を切ってしまう。

熊とトナカイは…吊り橋の下に真っ逆さま。片方が切れた吊り橋の小さな側面を今度はアライグマとウサギが渡ります。そして中間付近でお互いが出くわします。しばらくお互いジッと見つめ合い、考えます。そして…アライグマが小さくかがむと、ウサギは「そっか！」と自分の得意なジャンプ力を使ってアライグマを飛び越えました。そして、お互いに感謝し喜び合い、無事に吊り橋を渡っていきました。アライグマとウサギは自分の役割と相手の役割がわかっていたので、力を合わせる事ができたのです。

私達もお互いの役割を理解することが必要です。そして、そのためにはまず自分の役割を理解することが必要です。なぜなら、理解していないと、自分の役割でない相手の役割を見た時に、比較や劣等感が出てくるからです。「あの人はあんなことができていいな。私は無理。できない。私は駄目だなあ…」といった思いが出てきて、本来の素晴らしい役割から視線がどんどん逸れていくのです。

■ 全ての人にウロコがある (使徒 10:34,11:1-8)

使徒行伝で言いたいことは「目から鱗」という、全ての人自分が正しいと思って行動していたが、そうではなかったということです。使徒のこの箇所を見る時に、みんな自分の考えが正しいと思っていたことが良くわかります。しかし神様の計画は「どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行う人なら、神に受け入れられるのです。」ということでした。全ての人にウロコがある事がわかります。ウロコは変わることがない深い根です。ウロコの目を持った人はだれか？それは私たち自身です。相手の為にルールを使うとは、相手の役割を知ること。その為には自分の役割を知る事。自分の役割を理解していると神が備えて下さる備えに気づくことができます。ペテロの役割はユダヤ人宣教ではなく異邦人宣教でした。神の救いの計画は「選民」→「異邦人」→「選民」です。これは神の偏りではなく神の計画です。ウロコによって私たちは思い違いをしていることが往々にしてあります。自分の為に行っている事は覚えていないが人にしたことはよく覚えている。自分中心で生活していると見るべきもの気づくべきものが分からなくなります。自分の嫌なところは見ない事にしていると人に指を指してしまふ。これは偽善者です。自分が中心であることを知らなければなりません。今自分に与えられているものを自分のものだと思いませんか？正義というのは、正しいルールが行える人ではなくて、我の上に神様を置いて正しく生きよう、愛そうとすることを願う人です。これがすべての戒めの中心にあります。

■ 目から鱗の割礼を受けた人の生き方

割礼を受けた人々が神様に選ばれたのは異邦人であると知った時、イエスキリストを裁いた方法と同じ方法でペテロを裁きました。今も私たちは当時パリサイ人が行なった同じ方法で人々を排除し続けています。自分の思う通りにならないことで、相手を排除してしまうのです。でも実は排除したい人は自分なかもしれません。自分の汚い状況が愛せない私たちはルールを守ることによって自分の存在意義を見出そうとします。だから自分がやれていることが自分の鎧なのです。その結果、自分が定めたルールが行えない人を排除してしまうのです。私たちはそれぞれの違いを受け入れればその役割が理解できますが、理解できていない理由は、自分の役割を知らないからです。いつの時代も、この自己中心という思いは人々を排除し続けこれからも戦争を起

こし続け、結果、自分も死ぬのです。ルールは自分のためではなくて相手のためにあるのです。相手を守るためのルールは自分の役割を知ることなのです。神様はあなたに必要なものを必ず下さいます。しかし、大切なことはそれを見つけるかどうかで、自分が今日何をやるかわかっていない人は、その時々あなたに必要なアドバイスが与えられたとしても、それはいらないと思ってしまうのです。私たちは自分の役割を理解しなくてははいけない。勘違いしていることが多く、人を裁いているのです。

■ 自分のものを保つ思い

自分のものを保つ思いというものが出てきます。私たちはよくよく考えてみると自分の嫌なところを見せないために、自分の嫌なところには鎧を着せて、自分の嫌なところと同じ相手の嫌なところが見えてしまい、相手に指をさすことで自分を見ないように生きているかもしれません。大切なことは自分が中心であることを知らなければいけないということです。自分が人に指をさせるような状況にはない、いつも自分のものだと思って生きていないか。ということです。今あなたの目の前で大きな問題が起こった時、あなたは自分を守るために行動に出たのか、神様があなたにせよと言ったことのために行動したのかをよく考えなければなりません。

<マタイ 8:19-22> 今は暖かい布団と枕があって快適に過ごせていますが、もし、そのまくらやベットが取られてもその人について行きますか。いや、私には最低限必要なものは必要ですからと言いますか。私達もよく「祈ります」と使います。結局私達はどちらも自分中心で、何かこの鱗のような執着を持って生きています。あなたは今、何に執着していますか。今、神様はあなたの執着を取るためにこのような状況に置かれているのではないのでしょうか。そのような時に気をつけなければなりません。生きているようで死んでいる人を黙示録3章では、「そして死にかけている他の人々を力づけなさい」と、書いてあるように、死んでいる人とは自己中心な人と言われています。

■ 問いかけに聞く 言葉の動機を見極める 神様の目線 対 排除目線

イエスはあなたに問いかけてきます。私たちは必ず嫌なことをやれと言われた時、「嫌だ」という言葉が出てきますが、何がやりたくないのかを、よく考えなければなりません。あなたが嫌だと思うことは、どうでも良い理由によってやらない方向に持って行くのです。もし、あなたが自己防衛によって神様の職権乱用しているのであれば非常に危険です。この弟子たちは、失敗したけれどペテロはちゃんと説明して納得させ、神は彼ら異邦人をお選びになったこと、神は偏らないのだと納得したのです。この様に言葉の動機を見極めてください。神様の目線なのかそれともあなたは何かを排除したくて決断しているのかをよく見てください。

さいごに

クリスチャンは公正ではありません。自分が公正ではない事を神に悔い改めることから神との関係が始まります。しかし、私たちはその前に人を指さし裁いてしまいます。死に至るまで忠実がありますように。神は与え、神はとられる。しかし、決断するのは自分です。

『わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。——神である主の御告げ——彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。しかし、正しい人が、正しい行いから遠ざかり、不正をし、悪者がするようなあらゆる忌みきらうべきことをするならば、彼は生きられるだろうか。彼が行ったどの正しいことも覚えられず、彼の不信の逆らいと、犯した罪のために、死ななければならない。あなたがたは、『主の態度は公正でない』と言っている。さあ、聞け。イスラエルの家よ。わたしの態度は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの態度ではないのか。正しい人が自分の正しい行いから遠ざかり、不正をし、そのために死ぬならば、彼は自分の行った不正によって死ぬ。しかし、悪者でも、自分がしている悪事をやめ、公義と正義とを行うならば、彼は自分のいのちを生かす。彼は反省して、自分のすべてのそむきの罪を悔い改めたのだから、彼は必ず生き、死ぬことはない。それでも、イスラエルの家は、『主の態度は公正でない』と言う。イスラエルの家よ。わたしの態度は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの態度ではないのか。(エゼ 18:23-29) この御言葉を自分自身にいつも問いかけて歩みましょう！

(要約者:澤口建樹)

(2020年7月12日)